

「ドイツ・ルネサンス版画名作展：
デュッセルドルフ美術館所蔵—
デューラーとその時代」(山口県立美術館)
をもとにした鑑賞指導の試み
——「美術科教育特論演習Ⅱ」の活動報告と3つの学習指導計画——

岡田匡史* 小野素子** 羽仁真弓*** 三隅信洋***

A Report of “Special Theory and Seminar in Art Education II” and
Three Teaching Programmes for Art Appreciation Based on the Exhibition,
“Dürer und seine Zeit: Kunstmuseum Düsseldorf.” at Yamaguchi Prefectural Museum of Art

Masashi OKADA*, Motoko ONO**, Mayumi HANI***, Nobuhiro MISUMI***

(Received November 21, 1994)

キーワード：鑑賞教育、講読テキスト、異文化理解教育、指導方法、「ドイツ・ルネサンス版
画名作展：デュッセルドルフ美術館所蔵—デューラーとその時代」、題材開発、
イコノロジー
図像解釈学、読解能力

はじめに

「美術科教育特論演習Ⅱ」の今年度の受講生は、小野素子(現職派遣/山口市立大殿小学校)・羽仁真弓・三隅信洋の3名である。

演習の研究主題は、昨年度・一昨年度と同じく、「鑑賞教育」である。演習では、ベーシックな活動として文献講読(本章1. 参照)を位置づけ、文献講読で得た諸種の観点を参照し、また、資料収集・リサーチ活動を個人的に実施して、山口県立美術館開催の展覧会(今年度、選んだ展覧会は、「ドイツ・ルネサンス版画名作展：デュッセルドルフ美術館所蔵—デューラーとその時代」(次章参照))をもとにした、オリジナルな鑑賞題材を構想・開発することを、受講生が取り組むべき課題とした。なお、当課題は、山口大学教育学部附属山口小学校第6学年1・2組(指導者：静屋智教諭)での、同展をモチーフにした鑑賞授業を基幹とする、「第3回 鑑賞教育プロジェクト」の一環に組み込んでいる。

本論では、前半で演習活動を概説し、また、展覧会の概要を述べ、後半で題材化の諸ボ

* 山口大学教育学部

** 山口大学大学院教育学研究科(山口市立大殿小学校)

*** 山口大学大学院教育学研究科

イントを論じた後、各受講生の課題をまとめ、さらに自題材による模擬授業(担当者：小野)の実践報告も掲載することにした。

I 演習の活動概要

本章では、今年度の演習活動を、a.文献講読、b.「第3回 鑑賞教育プロジェクト」の2節に分けて概説しようと思う。

1. 講読テキスト

今年度、演習の講読テキストに選んだ文献資料は、「art education」誌に定期掲載の、「Instructional Resources(指導資料)」の中の1篇、「魚のようなもの：文化横断的な主題」である。テキストは基本的には鑑賞題材(学習指導計画)だと言えるが、エリザベス・ヴァランス(セントルイス美術館・教育部部長)が、自美術館の収蔵作品4点をもとに執筆したものであり、したがって、当美術館の鑑賞指導プログラムであるとも考えられる。テキストで想定しているプログラム実施対象者は、小学校/ミドル・スクール(4・4・4制の中間4学年を教育)の児童・生徒であり、日本の小・中学校の児童・生徒にはほぼ相当し、範囲が広い。

テキストは、冒頭で次の目標を掲げている。

「1つの共通主題に関する4種の文化の解釈を調べることで、小学校/ミドル・スクールの児童・生徒に美術表現様式における文化的違いを経験・理解させ、児童の批評能力を育てる。」

テキストでは、美術館教育サイドから、鑑賞指導の諸内容や方法論を具体的に提案しており、中でも、a.「鑑賞教育の主題的側面」(目標参照)、b.「指導方法」の2点に関する提案が優れ、その観点を学校教育の鑑賞教育においても参照するのは有意義だと思う。以下が、その2提案の概略である。

- a.「魚」を共通主題とし、時代・地域や文化等の諸背景が異なる、4種類の作品(現代美術を含む)を選び、その鑑賞を通じた異文化理解教育の実施
 - b.「言葉」の働きを、「観察・説明(伝達)・読解等の力=批評能力」を養い高めるための基盤だと考える鑑賞指導、また、それに関連して自由な想像・解釈を重要視する鑑賞指導の実施
- そこで、上記2提案について詳しく説明したいと思う。

(1) 鑑賞教育の主題的側面

岡田は、「美術史学習」の規範主義的性格が濃い学問的厳密さを1度離れて、ある主題(観点)をコアに、諸作品を自由に組み合わせ関連づけることで組織した、オリジナリティ・多様性に富む鑑賞指導の形態を、「主題学習」と呼んでいる。その指導形態は、比較鑑賞をベースに異文化理解的な学習展開を図る上で有効であり、テキストが提起する鑑賞指導は、「魚」を基本主題=コアとして、通常併置されることが稀な4点の鑑賞を試みる、典型的な主題学習である。テキストでは、「魚」を共通主題とする、以下、4種類の作品を鑑賞モチーフに取り上げている。

1. 「3尾の魚の容器(図1)」コリマ(西メキシコ)、B.C.200年-A.D.300年、土器、高さ11 $\frac{1}{2}$ 寸
2. 「散り落ちた花々の中を泳ぐ魚(図2)」リウ・カイ(中国人)、活動時期：1068-85年、絵巻(右側1/4の細部)、インク(墨)・水彩、絹、1幅10 $\frac{3}{8}$ ×99 $\frac{3}{8}$ 寸
3. 「鮭のクラン・ハット(氏族の帽子)(図3)」北西沿岸地方(北アメリカ)、トゥリングリット族(南アラスカ)、1850-1925年、木、絵具(塗料)、アワビの貝殻、貝の蓋、高さ15 $\frac{1}{3}$ 寸、魚の全長20 $\frac{1}{2}$ 寸
4. 「金魚鉢Ⅱ(図4)」ロイ・リキテンシュタイン(アメリカ人、1932年-)、1978年、ブロンズ鑄造、塗料・シーラー、39×25 $\frac{1}{4}$ ×1 $\frac{1}{2}$ 寸



図1 「3尾の魚の容器」^{ヴェセル} 4図版を講読
テキストより転載。



図2 「散り落ちた花々の中を泳ぐ魚」

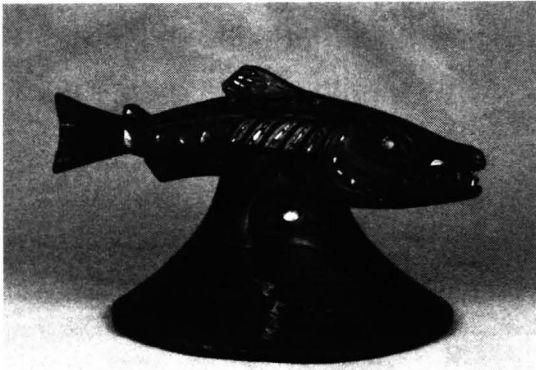


図3 「鮭のクラン・ハット(氏族の帽子)」



図4 「金魚鉢Ⅱ」

ヴァランスは、「文化の多様性を調べるのに、1つの視覚的な主題、特に複数の文化がモチーフに選んできた主題を(鑑賞指導で[岡田補足])使うことは、時に有益である。魚は、その目的に適う理想的主題である」と書いている。⁽⁴⁾ テキストの主眼は、「魚」をコアに集めた4点の鑑賞を通じて、美術表現の多様な外観・様態や機能を知り、また同時に、各表現を育んだ生活形態・習慣や自然観・宗教観等を学んで、諸種の文化体験を層厚く蓄積することである。テキストに明記されていないが、異文化に対する無知ゆえの偏見・先入観を取り除き、相互理解・相互尊重を基盤に諸文化間の調和的關係を実現しようとする、健全な国際理解の観点・態度を養うことが、本題材の最終的目標だと考えられる。

「美術による異文化理解教育」の試みは、「国際理解の推進」という学校教育の新しい課題に密に関わり、小・中学校学習指導要領(図画工作・美術)に記載された、下記の2事項の趣旨に合致するものである。⁽⁵⁾

a. 図画工作(第6学年):

「我が国及び諸外国の親しみのある美術作品などのよさや美しさなどに関心をもって鑑賞すること。」⁽⁶⁾

b. 美術(第2・3学年):

「日本及び世界の文化遺産としての絵画や彫刻などに関心を深め、それらを尊重すること。」⁽⁷⁾
「美術と人間とのかかわりに関心をもち、時代、民族、風土、作者などの相違による美術のよさや美しさを味わい、美術が国際理解や親善に果たす役割についても理解すること。」⁽⁸⁾
なお、演習では、羽仁が、「3尾の魚の容器」と関連する資料として、図録「大アンデス

文明展」⁽⁹⁾をもってきた。当図録には、魚の他、家畜(リヤマ)や貝・エビ・カニ・タコや野菜類をモチーフとする、「エコ・クラフト」とでも呼びうる容器類の写真資料が多数掲載され、簡潔な解説も付され、同種の多様な類型とこの種の表現様式を育んだ文化的背景について、幅広く知ることができた。

(2) 指導方法

ヴァランスは、「自美術館の全教育プログラムの目標は、児童・生徒の「見る」能力(岡田注: ability to seeの訳。テキストでは、perception[認識力]が同義的な語として使われている)を鋭敏にすることである」と書き、目標設定の根拠として、「展示室の大多数の鑑賞者が、最初に作品解説を読み、その後、美術を美術自身の用語で「読む」ことに自信がない状態で、作品を一瞥するだけである」という、硬直した教養主義的な鑑賞スタイル⁽¹⁰⁾がもたらす問題的現況を挙げている。その改善が美術館教育の課題になるわけだが、ヴァランスは、見る体験とアクティヴな思考活動を重視する立場から、以下3点の改善イメージ⁽¹¹⁾を列記している。

a. 速度をゆるめて見ること

b. 自らが美術評論家になること

c. 自身の美的資質によって鑑賞を楽しむこと

アメリカの美術館教育プログラムとして構想されたものでありながら、テキストが提起する脱教養主義のスタンスに立つ鑑賞指導は、学習活動の基軸を、知識受容から自ら考えること(解釈・価値判断等を含む)に移すことを明確化した、新学力観に適うものであり、その新学力観を基盤にしての再構築を図る、学校教育の鑑賞教育にとって、有益な指針に富むものである。

鑑賞能力の育成・鋭敏化を目標とする、その指導過程の順番は、①「見ることと記述(Seeing and Describing)」、②「想像(Imagination)」、③「解釈(Students' interpretations)」である。以下に、各段階の活動概略を示す。

①「見ることと記述」:

批評能力の基幹を「言葉」と捉え、視覚表現をその細部まで徹底的に言葉化する(言葉化には、「書く活動」と「話す活動」の、2種類の形態がある)。その過程では必然的に精緻で詳細な観察活動が要求されてくる。以下は、児童・生徒をそうした活動に導くために提案された、中核的な発問・指示事項である(番号は、前掲作品番号に対応)。

1. 美術館に展示されている同種の数個の容器から、友達が見た瞬間に「3尾の魚の容器」を識別できるように、その諸側面を明瞭に記述した手紙を書く。
2. 絵巻の1場面を選び、友達がその場面だと解るように、細部を入念に説明する。
3. 写真資料を見せる前に、身振りを^{ジェスチャー}用いず言葉だけで、パートナーに「鮭のクラン・ハッ

ト」を説明する。パートナーは説明によって得た作品像をクレヨン等で描き、描画結果を写真資料と比較する。

4. 題名や「金魚鉢Ⅱ」に関するどんな情報・知識も与えずに、それが何かを問い、また、その諸細部や感想等について質問する。最後に、魚(モチーフ)に3通りの方法で名前をつける。

②「想像」:

様々な観点・角度からの発問を軸に、想像(自由で主観的な読解)を展開し、作品との対話を楽しみ深める。物語的な要素を重視し、正解・学問的解釈は第二義的だと考える。

③「解釈」:

実技室での表現活動の諸体験を通じて、作品の造形的諸特徴や意味をより深く理解し、作品の再解釈を図る。以下は、各表現課題の概略である。

1. 他の水棲動物をモチーフにした、同種の空洞構造の土製ポットのデザインを描く課題。「3尾の魚の容器」の模倣的・追体験的な制作(2尾・4尾のデザインも試みて比較鑑賞)。
2. 生活の中の一連の出来事(ゆっくりした展開・速い展開etc.)を画題に選び、水彩画の絵巻セクションズを制作(18号の3領域をテープで接着し、軸棒で巻き上げ、編み糸で結ぶ)。
3. ホッチキスで留めて円錐型にした紙で、身近で重要な動物(1・2匹を選ぶ)の特徴を表現ミノーした、クラン・ハットを制作。他に2色のみや多種の色のデザイン、金魚・雑魚等の小魚をモチーフにしたデザインも試みる。
4. 青い工作用紙でつくった円筒型の「金魚鉢」を、教師が人数分準備。その外側の面に、切った紙・リボン・透明紙を貼り、a.「金魚鉢Ⅱ」の再現、b.オリジナルなデザインの2種を体験し、表現意図に関する討議や比較鑑賞を実施。発展的活動(a follow-up activity)として、どちらかをモチーフに背景の諸品も取り入れた平面構成的な描画課題を試みる。

表現課題を鑑賞指導プログラムに組み込む、上掲1.~4.の諸提案は、日本の美術教育に定着してしまっただ観がある、「表現=主/鑑賞=従」という、鑑賞の付随的・第二義的イメージの見直しを迫るものである。上掲諸提案では、2領域の関係が逆転しており、表現課題を、①・②で得た学習事項を諸側面から掘り下げ、鑑賞体験を厚く補強し、作品の解釈・認識を拓げるための、補助的活動として位置づけている。

なお、小野は陶芸専攻でもあり、1.で提案された表現課題に実際に取り組むことで、その学習効果を自ら体験・検証してみようと、「3尾の魚の容器」の試験的制作を実施した(図5)。



図5 小野素子「3尾の魚の容器(小野版)」1994年6月、萩土、白化粧(装飾部を他の顔料でもっと白くする予定)、釉薬:大正黒(顔料)を刷毛塗り、成形法:紐造り、焼成温度:1250℃、高さ47.0×幅23.6×奥行25.2cm 写真撮影:岡田

2「第3回 鑑賞教育プロジェクト」

演習では、今年度も、「鑑賞教育プロジェクト」(第3回目)と題する総合的課題を設け、その実施・推進を図ることにした。「第3回 鑑賞教育プロジェクト」については先に簡単に触れたが、その基幹的活動は、山口県立美術館開催の展覧会の鑑賞をメインに位置づけた、附属山口小学校第6学年1・2組での鑑賞授業である。今年度は、「ドイツ・ルネサンス版画名作展：デュッセルドルフ美術館所蔵—デューラーとその時代」をモチーフに選んだ。

プロジェクトの一端を担う受講生側の課題は、前述した文献講読と、同展をもとにした題材開発である。鑑賞授業は、その2課題を柱とする演習活動と緊密にリンクする形で、毎年度、静屋教諭が行っている(岡田・全受講生は指導補助的活動を担当)。

今年度は、受講生の1人、小野が開発した鑑賞題材(Ⅳ・1・2 参照)によって、静屋教諭が鑑賞授業を行うという、演習側にとっては画期的とも言える試みを実現することになった。その試みは、文献講読と個人的リサーチをベースに、既成の授業観に縛られない、優れた柔軟な着想で構築された、小野の鑑賞題材に感銘した、静屋教諭の提案によるものである(なお、小野は、附属山口小学校の図工・研究協力員[平成3年度~]として、静屋教諭の教育実践・研究活動を諸面からサポートしてきている)。

上記展覧会の概略についてはⅡを、題材開発のポイントについてはⅢを参照願いたい。また、現在、鑑賞授業の実践報告・考察を中心とする、プロジェクトに関する学会発表・論文を計画中である。本節では、プロジェクトの活動概略を示すに留める。

- ①文献講読とフリー・トーク。
- ②「ドイツ・ルネサンス版画名作展：デュッセルドルフ美術館所蔵—デューラーとその時代」の鑑賞。
- ③題材開発(準備段階では、⁽¹³⁾図録・⁽¹⁴⁾新聞記事・⁽¹⁵⁾関連書籍等をフルに活用して、諸角度から鑑賞題材のアイデアを練る)。
- ④a. 模擬授業1=事前授業(指導者授業立案者)：小野。対象者：「美術科教育法Ⅰ」受講生12名→b. 展覧会鑑賞(前記12名の課題)→c. 模擬授業2=事後授業(1と同じ)(Ⅳ・1・3 参照)。
- ⑤静屋案・小野案の2案による鑑賞授業(指導者：静屋教諭。対象児童：附属山口小学校第6学年1・2組80名。授業記録：岡田・小野。カメラ撮影：羽仁。ビデオ撮影：三隅)。両授業の基本フォーマット：a. 事前授業(教室)→b. 展覧会鑑賞(美術館)→c. 事後授業(教室)。
- ⑥当論文：演習活動のまとめと受講生の課題の編集(a. 題材の考察、b. 学習指導計画)。
- ⑦「第3回 鑑賞教育プロジェクト」に関する学会発表(共同発表者：岡田・静屋・小野。「第17回 美術科教育学会」[1995年3月28日~30日、和歌山大学])。
- ⑧同プロジェクトに関する論文(共著者：同3名。「美術教育学」第17号に投稿予定)。

注

(1) Instructional Resources: Elizabeth Vallance, "Something Fishy: Cross-Cultural Subject-Matter." *art education*, vol.44, no.3, May 1991, pp.25-28; 37-40.

(2) *ibid.*, p.26.

(3) 主題学習に関する、次の4論考を参照願いたい。

○2「美術史学習的な形態から主題学習的な形態への重心の移動」/Ⅲ「ミュージアム・アドベンチャー」の活動実践の評価(学校教育の鑑賞教育の観点から)岡田匡史「子どもの美術鑑賞Ⅰ—「ミュージアム・アドベンチャー」と学校教育の鑑賞教育」『藝術研究』年報第7号、広島芸術学会、1994年、pp.1-19.

○2「主題学習的な鑑賞学習をめぐって」/Ⅴ「関連的事項」岡田匡史「子どもの美術鑑賞Ⅱ—「ミュージアム・アドベンチャー」と学校教育の鑑賞教育」『研究論叢—芸術・体育・教育・心理』第44巻・第3部、山口大学教育学部、1994年12月発行予定

○3「美術史学習から主題学習への移行」/Ⅱ「新しい展開」岡田匡史「鑑賞教育の新しい展開」『大学美術教育

学会誌」第27号、大学美術教育学会、1995年3月発行予定

○1「主体的な鑑賞学習の1形態：主題学習の試み」／Ⅲ「鑑賞題材化の観点」岡田匡史・静屋智「第3回 鑑賞教育プロジェクト—「バウル・クレーの芸術」展(山口県立美術館)の題材化」【山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要】第6号、1995年3月発行予定

(4)op. cit., [1] p.26.

(5)価値観・文化的背景が複雑に異なった、諸人種・諸民族が住むアメリカでは、近年、「美術による異文化理解教育」が多種の側面から論議され、活発な実践が展開している。下記の特集記事を参照。

“Special Theme: Cultural Diversity.” *art education*, vol.47, no.4, July 1994.

(6)「第7節 図画工作」文部省『小学校学習指導要領』大蔵省印刷局、1989年、p.92.

(7)「第6節 美術」文部省『中学校学習指導要領』大蔵省印刷局、1989年、pp.73-74.

(8)同書、p.74.

(9)友枝啓泰・藤井龍彦・山本紀夫・盛野三利編集『国立民族博物館第1回特別展「大アンデス文明展」(図録)』朝日新聞大阪本社企画部、1989年

(10)op. cit., [1] p.26.

(11)ibid., p.26.

(12)ibid., p.26.

(13)フリードリッヒ・W.ヘックマンズ監修、斎藤郁夫・岡本和子翻訳『ドイツ・ルネサンス版画名作展：デュッセルドルフ美術館所蔵—デューラーとその時代(図録)』山口県立美術館・山口朝日放送・朝日新聞社、1994年

(14)開催前、デューラーの活動歴や美術史的背景・関連的諸動向を解説した、「アルプス越えて—デューラーの周辺(執筆：前田直人)」が、「朝日新聞」山口版に10回にわたって連載された。また、開催期間中も、主要作品を解説した、「ドイツ・ルネサンス展から」が、同紙面に連載された。

(15)演習では、第3日「デューラーの「メレンコリアI」について」若桑みどり【イメージを読む—美術史入門】ちくまプリマーブックス69、筑摩書房、1993年、pp.129-164.、を題材開発用の基礎資料にした。

II 展覧会の概略

「ドイツ・ルネサンス版画名作展：デュッセルドルフ美術館所蔵—デューラーとその時代」は、デュッセルドルフ美術館が所蔵する、ドイツのルネサンス期の版画124点(カタログNr. [図録])で構成され、山口県立美術館のみで約1箇月間(1994年6月3日～7月10日)開催された。

当展は、アルブレヒト・デューラーの最初期からの版画76点を展観の中軸に据え、その中には、精確な観察眼、質高い線刻(彫り)の職人的メチエ、そして、人体に関する比例理論の成果を基盤に生まれた、「アダムとエヴァ(図6-⑱・表1-⑱)」や、集大成的な3大銅版画(「騎士と死と悪魔(図6-⑬・表1-⑬)」、「書斎の聖ヒエロニムス(図6-⑤・表1-⑤)」、「メレンコリアI(図6-⑰・表1-⑰)」が含まれていた。他に、同時期に活躍したルーカス・クラナハ(父)等の仕事、デューラーに木版画を指導した師ミヒャエル・ヴォールゲムートや、デューラーに重要な指針・影響を与えた銅版画の先駆者マルティン・ショーンガウアー等の1世代前の仕事、それに、後継世代の多様な展開が展観された。

版種は彫刻銅版画と木版画が主であり、他にドライポイントとエッチングが数点あった。当展では、線刻表現の密度と写実レベルを飛躍的に高め、前人未踏とも言うべき表現水準に到達した、デューラーの版画がやはり圧巻であった。1498年に出版され、国際的評価を得た木版画シリーズ「ヨハネ黙示録」や、続く「マリアの生涯」等では、木版画の技術的限界を打ち破った、驚嘆すべき「線の勝利」⁽¹⁾を堪能することができる。また、前記したような銅版画では、線(点的要素も含む)が一層緻密で、無数の表情を生み、白黒でありながら、逆説的に無限の色彩が味わえるような階調表現を体現している。線の美しさ、光・陰影の交錯、質感の妙、輪郭・形態の有機的な複雑さ、細部の精緻さetc.が、厳密に練られた構図によって1つに統合されており、その鑑賞は驚愕と同時に至福感を伴うものである。

なお、当展には、素朴な聖画類(彩色木版画)も同時に展観されたので、デューラーの版画と見比べ、両者間の表現水準の差を具体的に知ることができた。

フリードリッヒ・W.ヘックマンズ(デュッセルドルフ美術館)は、デューラーの版画観に触れ、次のように書いている。

「もっともデューラー自身、多大な労力を必要とする油彩画よりも、旅行中の風景の記録として描かれた水彩画よりも、科学研究のためや短期的な注文で描いていた素描よりも、銅版画と木版画のほうを高く評価していた。」⁽⁴⁾

また、当展の企画に携わった、斎藤郁夫専門学芸員(山口県立美術館)は、次の関連の視点を書いている。

「線表現を主とする版画は、当時のデューラーにとって、未開発の分野であるとともに、大いに創造的興味を覚える分野でもあったといえるのではないだろうか。」⁽⁵⁾

デューラーの版画は、上述した形式的な側面フォーマルの他に、意味的な側面イコノロジカルも重要である。聖書を靈感の源とし、また、人文主義的教養を基盤にして、その版画には、図像解釈学的なアプローチを要する諸種のイメージが満載された。したがって、その謎解き・解説を試みるのも、鑑賞の醍醐味の1つに数えられよう。図像解釈学イコノロジの書籍類も多数あって参考になり、最近では、ハルトムート・ベーメの著書の翻訳が刊行された。⁽⁶⁾

加えて、デューラーの版画を筆頭に、展覧された諸作品は風俗史資料的な価値をも備え、そこに克明に描写された服飾品や家具・調度類や村落・町の景観等を見ることで、15・16世紀ドイツの生活の様子を想像することができる。下村耕史は、ヴェネチア旅行を体験した時期のデューラーの素描に触れ、「彼の眼はドイツやイタリアの風俗・衣裳に向けられ、当時のドイツの騎士の甲冑を身に着けた姿や、ニュルンベルクの婦人の衣裳姿が、まるで風俗史家が描いたかのように、客観的に正確に写された」と書いている。⁽⁵⁾

当展には、日頃、画集・美術雑誌等でよく見かける版画が多数出品されていたが、その実物を見る機会は限られている。ヘックマンズは、今回、展覧された3大銅版画の稀少価値と、3点の鑑賞の意義を強調して、「地球上でほんの数点しか残されていないデューラーの手になるオリジナルを目にした者は数少ない」と書いているが、当展は、その3点を含む諸版画の実物に触れる貴重な場を提供した展覧会であり、学術・教育両者の立場から高い評価が与えられてしかるべきである。

注

- (1)5「開かれた扉の工房」の章に掲げられた表題の言葉(p.98.)。著者：フランシス・ラッセル、編集顧問：H.W.ジャンソン、本書の顧問：ルース・サウンダース・マガン、日本語版監修：坂崎乙郎『巨匠の世界 デューラー(The world of Dürer)1471-1528』タイム ライフ ブックス(TIME inc.)、1973年
- (2)フリードリッヒ・W.ヘックマンズ(Friedrich W. Heckmanns)「アルブレヒト・デューラー—人と作品(Albrecht Dürer—Person und Werk)」前掲図録I-13] p.15.
- (3)斎藤郁夫「色彩と形」総合させる—ドイツ・ルネサンス版画名作展：デューラーとその時代」『朝日新聞』1994年5月28日朝刊
- (4)Hartmut Böhme: Albrecht Dürer: Melencolia I. —Im Labyrinth der Deutung—, Fischer Taschenbuch Verlag GmbH, Frankfurt am Main, 1989.ハルトムート・ベーメ、加藤淳夫訳『デューラー〈メレンコリアI〉—解釈の迷宮』シリーズ「作品とコンテクスト」、三元社、1994年
- (5)下村耕史「デューラーの素描—素描芸術の成立」下村耕史編著『世界の素描7 デューラー』講談社、1978年、p.28.
- (6)前掲論文[2] p.16.

Ⅲ 展覧会の題材化

美術鑑賞には、a.「造形的側面(素材・技法、色や材質、形態・構造や表現様式、サイズ etc.)」と、b.「意味的側面(表現の動機・意図、主 題・概 念、メッセージetc.)の、2種の基

本的側面があり、a.を眼に見える(観察や計測・秤量や客観的記述が可能な)側面、b.を不可視の主観的側面と捉えることもできる。鑑賞の題材開発では、その2側面を押さえる必要があり、最初に、前者、造形的側面を概観しておきたいと思う。

1. 造形的側面—2つの展覧会の比較

前年度、演習で選んだ展覧会は、「パウル・クレーの芸術(略称：クレー展)⁰⁾」である。受講生3名(隅敦[現職派遣/下松市立中村小学校]、小田村泰彦、伊藤和子)は、今回同様、そのクレー展をもとに鑑賞題材の構想・開発に取り組み、課題の成果を共著論文・学習指導案集にまとめた。だが、モチーフの展覧会、特にその造形的側面が、前章で概略を述べた、「ドイツ・ルネサンス版画名作展：デュッセルドルフ美術館所蔵—デューラーとその時代(略称：デューラー版画展)」とは随分違っていた。そこで、前回の課題の復習を兼ね、また、デューラー版画展の特色がより明瞭になるように、2つの展覧会を簡単に比較してみたい。

デューラー版画展とクレー展の間には、前者が版画展、後者が絵画展(とは言え、初期銅版画シリーズ[「乙女(夢をみて)」等]他、エッチングやリトグラフを数点含む)という、表現範疇の違いがあるが、造形的側面については次のような相違事項4点が認められる(A.: デューラー版画展[主にデューラーの版画]、B.: クレー展)。

①素材(表現媒体): A.銅版画・木版画(インク、紙)⇔B.多種の材質(a.描画材=鉛筆、木炭・チョーク・クレヨン・パステル類、水彩(関連素材=墨、インク・ペン、糊絵具、グアッシュ)、油彩、テンペラ、樹脂類等。b.基底材=各種の紙・布や合板。c.地塗り=糊絵具・石膏等)

②技法: A.彫り・線描表現(銅版画=凹版[銅板、ビュラン]、木版画=凸版[板、彫刻具]):
クロス=ハッチング
輪郭素描による形態描画。平行線・交叉線を駆使した、明暗階調・彫刻的ヴォリューム感・材質感等の表現⇔B.多様な技法: 線描・点描・色面表現、定規・コンパスによる直線・曲線構成、新種のテクニック(油彩転写素描・スパッタリング等)、マチエール処理、諸素材の併用

③色: A.白黒表現(彩色木版画・2色刷り版画を含む)⇔B.色彩表現(ドローイング[単色]・版画を含む)

④様式: A.観察素描、階調表現、透視図法(線遠近法)、人体比例理論、構図等に基づく、
*アロスクーロ
写実表現様式⇔B.抽象化・模様化された記号的モチーフ、画面の分割・充填や諸形態の配置構成等が特徴的な、具象・抽象が融合した表現様式

比較を見て解るように、両展の造形的側面は諸点で著しく異なり、よって、今回の課題では、前回の課題を参照しながらも、学習事項を改めて吟味し、指導法・授業展開といった「ストラテジー」について新たに考える必要がある。版画鑑賞の場合、そのメディアのクラフト的性格ゆえに、素材・道具類や製版・印刷の諸技術や表現効果等の知識・理解が基本前提になるため、列記4項目に関する学習の設計は特に重要である。

ところで、今、「知識・理解」と書いたが、新学力観の見地からは、知識習得(すなわち、記憶)や知的理解に偏った学習展開は、自己教育的活動の芽を摘みがちであり、児童の関心・意欲や主体性・能動性を育みがたくすると認識されている。「鑑賞教育プロジェクト」が対象にする第6学年でも、知的関心が高まり、批評的観点・論理的思考が発達してくる時期だとは言え、鑑賞授業を解説・講義だけで構成することには限界がある。そこで、今回の課題では、木版画や塩ビ板版画(簡易なドライポイント)の制作、鉛筆・極細フェルトペン等による線描練習や簡単な素描、各種透視図法に基づく風景画・室内画制作等を、先

行学習、または、鑑賞後の関連的な表現課題(講読テキスト③「解釈」I-1。(2)参照)としてセットし、「知識・理解」と「体験」の両活動をバランスよく配することが理想的だと思える。

なお、授業実践の観点より、上掲2展の鑑賞題材化の前に予想された、一長一短の事項を少し記しておきたい。題材開発にあたり、下記諸側面の検討は、当然、必要である。

カラフルで表現類型が豊富だという単純な理由によるが、クレー展は、児童の鑑賞意欲を刺激し、その精神状態を躍動的に変え、鑑賞の楽しさを保証できるように思えた。他方、デューラー版画展は、小サイズの白黒・単色刷り版画がほとんどであり、児童が展観を地味で単調だと感じやすく、加えて聖書や神話・伝説等に取材した画題が難解であるため(次節参照)、意欲喚起が難しいのではないかと懸念した。しかし、それゆえ、前者では、「何を見るか」が定まりにくく、活動展開が散漫になりがちだと思え、逆に後者では、版画表現の限定性ゆえに、また、写実表現なのでモチーフを識別・理解できるため、明確な主題・目的意識に支えられた鑑賞学習の実現が期待できた。

2 意味的側面—鑑賞の読解的アプローチ

前述したように、鑑賞教育では意味的側面の学習もまた重要である。そこで、本節では、(1)クレー展、(2)デューラー版画展の順番で、その側面を概観しようと思う。

(1)クレー展の場合

クレー展では、抽象的傾向が顕著な諸種の作品が展観されたが、その絵画は、形式面の革新だけを強調しようとする類の抽象絵画とは一線を画するものであり、濃密で複雑な意味を有する。

「造形思考」には、クレーの根幹的な表現主題である、「1対の対立概念」の1例として、⁽³⁾「カオス - 宇宙(無秩序 - 秩序)」が示されている。クレーは、「光 - 闇、運動 - 静止、物質 - 観念、善 - 悪、生 - 死etc.」という、緊張・拮抗関係にある対立概念(2元論)の止揚を、フォルムの有機的生成における本質的契機だと考えた。また、その主題と関連し、「運動」をキータムとする動的な造形論を展開した。クレーは、そうした理念的考察の蓄積を基盤に、多種の魅力的な造形語彙を發明・創造し、それらで構成された画面は、さながら「語る絵画」の観を呈するものである。

前年度の鑑賞授業(「第2回 鑑賞教育プロジェクト」)では、静屋教諭と協議した結果、この意味的側面の重要性を考慮し、クレーの造形語彙を読む活動(=読解)を中心軸にした⁽⁴⁾授業展開を図ろうということになった。同種の観点は演習課題でも見られ、小田村は、「矢印」を表現内容を読み解くためのキーワードとする鑑賞題材、「バウル・クレー → 矢印の秘密←(小学校第6学年)」を構想・開発した。⁽⁵⁾

(2)デューラー版画展の場合

本小節では、下記3項目について概説する。

A.「イコノロジー 図像解釈学」と鑑賞授業

B.読解能力の発達

C.異文化を読む

A.「イコノロジー 図像解釈学」と鑑賞授業

デューラー版画展では、a.「図解性に優れ、モチーフの識別が容易な写実表現様式」、b.「モチーフに込められた象徴・隠喩・寓意的要素」の2点により、前回の鑑賞授業で試みた「読解(前述)」を、より徹底した形で推し進めることが可能である。この場合、モチーフを^{イコノロジー}解釈し、描画内容について諸角度から考えることは、基本的に「図像解釈学」の範疇に属す

る活動を意味する。

そこで、まずは図録・関連書籍類を参照し、デューラーの版画に関する学説を簡単に確認しておきたい。デューラー版画展で展覧された1点、「アダムとエヴァ(人間の堕落)」に描かれた諸動物の寓意に関する、フランシス・ラッセルの次の解説は、その1例である。

「大鹿、うさぎ、猫、雄牛はそれぞれ憂うつ、好色、残酷、怠惰という邪悪な性質をあらわしている。⁽⁶⁾」

また、多血質・胆汁質・粘液質・憂鬱質(空気・火・水・土[4元素]に順番に対応)が構成する4気質論(4性論)や、キリスト教的見地からすれば異端的な占星術(運命論)・錬金術・神秘哲学等の諸観点を踏まえ、エルヴィン・パノフスキー等、諸学者が解説を試みてきた、「メランコリアI」は、中心的モチーフである翼をもつ女性像や天使や動物(犬・蝙蝠)の他、多種の図像を配した版画である。ヘックマンズは、「ここに描かれているすべてのモチーフをひとつずつ観察し、グループに分類していくことが、複雑に入り組んだこの作品を理解する近道である⁽⁷⁾」と、当版画の鑑賞(読解)のポイントを指摘しているが、ここでは若桑みどりによる下記分類⁽⁸⁾を参照したいと思う。

第1：大工道具類

第2：背景の虹や彗星(土星)

第3：はしごや天秤や砂時計や鐘や魔法陣

第4：球と謎めいた多面体などの幾何学的要素

上記図像、例えば翼をもつ女性像は、a.「靈感を受けた天才の挫折感(パノフスキー)⁽⁹⁾」/b.「憂鬱質が天使の翼によって最高位の靈感を得ているところ(フランセス・イエイツ)⁽¹⁰⁾」、34の魔法陣は、a.「活動的なジュピターの力をよび寄せる魔術(パノフスキー)⁽¹¹⁾」/b.「デューラーの母親の命日の総数(他の学者)⁽¹²⁾」、大工道具類は、幾何学・創造的精神、虹・彗星は不吉etc.と解釈されたりする。ちなみに、3大銅版画に共通に描かれた図像は、「人生のほかなさ⁽¹³⁾」を象徴する砂時計である。それら諸解釈を緊密に結びつけうる1種の論理を見出し、表現の本質的テーマを解説し組み立てることが、図像解釈学の根幹だと言える。^{イコノロジー}

そうした図像解釈学的方法論を鑑賞授業に取り入れる試みは、鑑賞の読解面の実質的進展をもたらし、有意義だと評価できる。が、諸種の学的解釈が指導者側の知的関心を大いに刺激するものとは言え、それらを紹介・解説するだけでは、単なる知識教授の展開になってしまうことを忘れてはならない。

学習者が積極的に参加できる鑑賞授業にするには、知識教授の発想を1度離れ、むしろ^{イコノロジー}図像解釈学の魅力・醍醐味を擬似体験できるような展開を構想すべきである。具体的には、先のヘックマンズの指摘を参照し、学者と同じスタンスで、画面の中に各種図像を見つけ、その意味や図像間の関連性を自ら考える活動を仕組むことである。ここでは、その活動を、「読み考え解釈する読解的活動」と呼ぼうと思う。その展開の基本的順序は、「画面の観察→モチーフの発見・識別(knowing what it is)→自由な想像活動(主にストーリー構成)→表現の読解」と整理することができる。学説の紹介・解説は、この一連の学習を通過した後実施すべきである。

なお、図像解釈学的方法論を具体化する上で、講読テキストが提起する、①「見る」と記述(Seeing and Describing)、②「想像(Imagination)」、③「解釈(Students' interpretations)」

という、3段階の指導プラン(I-1-(2)参照)が参考になる。

学校教育、特に小学校の鑑賞教育では、学習者の自由・主体性を最大限保証しようとする観点から、「見て感じる感覚的・直観的鑑賞」を実践するケースが多い。無論、その教育的意義は十分認められるが、それだけでは活動の実質が「好き／嫌い」という表層的レベルに限られてしまうように思える。また、もし次段階(小学校高学年・中学校を想定)で、技法論・様式論等をメインとする美術史的事項の解説にウェイトを置く鑑賞授業が実施されたとすれば、両段階間の急激な飛躍が問題化し、何よりも知識偏重の無理な展開に陥る危険度が高まると言える。

そこで、第1に、活動の実質を深める、第2に、知識教授にウェイトを置く鑑賞授業であれば、学習者の知識獲得に対する意欲が内発的に高まった時期を確認してから実施する、第3に、上記2段階間のパイプを意味する助走的活動を設ける、という3点が問題解決に必要な基本事項になる。先の「読み考え解釈する読解的活動」は、第1に、鑑賞活動を多面的に深化でき、第2に、知識を獲得・拡大しようとする能動的態度を育成でき、第3に、好悪の価値観によらず、客観的・論理的思考を軸に自らの鑑賞活動を構築していく力がつけられるということから、上記3点すべてに関わり、次の知識教授段階にリンクしていく重要な助走的活動だと考えられる。

とは言え、知識の獲得は第一義的事項ではない。自ら考える密度濃い過程プロセスが重要である。若桑は、千葉大学教養部の美術史の講義で、1受講生(建築科)が「メランコリア I」を見、「多面体のなかにガイコツが見える」と言った事例を挙げ、その既成観念に囚われない新鮮な着眼を評価し、「われわれは定説や常識に邪魔をされて、純粋に画面をみることができなくなっています」と書いて(14)いる。学校教育の鑑賞教育では、同種の展開が起きる可能性がより高く、それゆえ、指導者が知識・定説に縛られずに、学習者が自らの観点で自由に試みた解釈(=新説)を認め尊重・賞讃できるかどうか、指導の重要なポイントになってくる。

B.読解能力の発達

諸種のモチーフを脈絡なく羅列的・空間充填的に配した描画表現が頻繁に観察できる、3～4歳の時期を、一般に「カタログ期」と呼ぶ。そして、次段階(通称「図式期」[4歳～小学校低学年])になると、子どもは配列法・透明画法(X線画法)レントゲン・擬展開図法等の各種作画法を駆使し、諸モチーフ間の意味・機能の関係や空間的な位置関係の整合性の表現に努め、論理的一貫性を備える1つの情景が表現できるようになる。

実はこれと似た展開が、読解能力に関しても認められるようである。小野が報告した次の観察事例は、その1根拠である。

小野が、題材開発に必要な数種類のデューラーの版画資料を部屋に拡げておいたとき、それらを見た修平君(次男、5歳)と尚子さん(長女、中学校1年生)の反応が違った。修平君は、1個1個のモチーフに興味を刺激され、尚さんは、複数のモチーフで構成された場面・出来事、つまり画面全体の意味に注目した。

2ケースより、読解能力には、a.「個々のモチーフの識別」、b.「画面全体の解釈」という、2種の水準レベルがあり、その内、諸モチーフの意味的・論理的関連づけやストーリーの想像・読解を要する、bの方が、aよりも高度だと考えられる。さらに、現段階では実証性が弱いいため、結論づけるのは性急だと思えるが、「a.→b.」という流れが読解能力の発達段階だと推論することが可能である。

そこで、読解活動にウェイトを置く鑑賞授業をプランする場合、いきなりb.に飛躍せず、

上記「a.→b.」の流れを基軸に学習活動を組織・構造化すべきである。「モチーフを見つける→モチーフの意味を考える→諸種のモチーフが集まって表わす意味を考える」は、簡単な図式だが、その観点からの展開の1例であり、前述した「読み考え解釈する読解的活動」の展開もこれと同構造である。また、小学校6年間の鑑賞の一貫的カリキュラムを構想・編成する場合も、先の流れが基軸になる。b.、すなわち、作品解釈の比重が、中学校段階で最も高まるという展開は、理論的観点より発達実態に適うと判断できる。

C.異文化を読む

ところで、a.「^{コード}個々のモチーフの識別」、b.「^{コンテキスト}画面全体の解釈」は、第1に、鑑賞者の観点・生活体験・文化的価値規範等の種類、第2に、モチーフが置かれた文脈(意味的背景)の違いによって、様々に変動しうる。講読テキストには、「魚」をモチーフとする4種類の作品が選ばれたが、その「魚」の解釈、また、「魚」と他のモチーフとの関係に関する解釈は、文化圏・美術観が違えば、当然、異なるはずである。ちなみに、キリスト教美術では、「魚」はイエス・キリストを象徴する重要な図像であり(⁰⁶)(*iχθυς* |イクトウス|:ギリシャ語[縮小略語]に由来)、そこから「魚+籠のパン=聖餐」や「魚+壁の釘=贖罪」といった応用的解釈が生まれた。⁽¹⁷⁾

小野によれば、第6学年(小野の課題の対象学年)になると、特に男子の間で、描かれた場面を滑稽に諧謔的に解釈しようとする傾向が増す。そのため、フリー・トークで小野が指摘したように、例えば「メランコリアⅠ」を、「憂鬱な表情で物思いに耽る女性」と「数字やコンパス・定規類や2種の幾何学的要素」の2カテゴリーを関連づけることで、「算数の問題が難しくて解けないところ」を描いた作品だとする解釈がきつと出てくると思う。その解釈は、広くは児童が属する現代日本文化の価値観、個別的にはその発達・成長レベルにおける体験の質・量を背景に構成されたものである。

さて、もし鑑賞活動がその種の解釈の範囲内で終わってしまったのであれば、問題である。そこから1歩踏み出し、その児童が、さらに別種の解釈、ならびに、その解釈の背景を知り、最終的にはデューラーの表現意図や「メランコリアⅠ」が生まれた文化的諸背景を知りうるような展開が理想的である。そして、その展開は、基本的には「美術による異文化理解教育」の実践を意味するものである。

「異文化を読む」鑑賞の第1の側面は、「眼に見える事項」であり、今回の展観では、画面を仔細に観察することにより、例えば15・16世紀ドイツの風俗・生活環境面の諸事象を知ることができる(Ⅱ参照)。第2の側面は、「背景的事項」であり、図像解釈学のキー的な考察対象でもある、思想・宗教観・文化観等、表現を成立させた背景・要因を学び理解することが、第2の側面の中心的テーマである。今回、聖書記事に関する作品が多数展観されたが、一般にキリスト教的主題は日本人にとって馴染みが薄く、難解に映るため、読解対象が「眼に見える事項」に限られがちである。無論、自由な空想的解釈も評価すべきだが、例えば「騎士と死と悪魔」のような作品の場合、その表現基盤である宗教観を知らなければ、その鑑賞は単に外観を見るだけの浅薄なものになりやすい。しかし、次の聖句(「新訳聖書」「エペソ人への手紙」6章11節、14～17節)を知っていれば、作品解釈の実質的な深まり・拡がりが可能になる。

「悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身につけなさい。」⁽¹⁸⁾
「腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、

みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のこばを
受け取りなさい。」⁽¹⁹⁾

「背景的事項」を知ることは、異文化理解の本質的前提である。だが、その活動の実質は、それが最も正しいと信ずる鑑賞者側の価値規範をもって、未知の価値規範を理解しようとするものであるから、実際は簡単ではない。若桑は、その点に触れ、次の見解を書いている。「合理主義、近代科学万能思想によって、こうした神秘哲学(マルシーリオ・フィチーノ、アグリッパ・フォン・ネットスハイム等の思想系譜(岡田補足))がいがわしいものとして過去に隠蔽されてしまったいまでは、昔ははっきりとわかっていた象徴をよびおこす
にはたいへんな研究が必要です。」⁽²⁰⁾

横道に逸れるが、この学的観点からの指摘は、現代の国際社会の局面にスライドすることが可能である。実は同種の事態が、現代文明の恩恵に浴する欧米先進諸国(日本も含む)と他の諸国・諸民族の間に顕著に認められるのである。異質な価値観に対する先進諸国側の無知・偏見・誤解が、先住民族問題・人種差別問題等の根底に横たわっており、悪しき状態を増幅している。観光的態度で異文化の表層的知識を得るのではなく、「相互信頼・
尊敬」⁽²¹⁾の確立に不可欠な、複数の異なる価値観を認めうる公正な態度を育成することが、今ここで考えている異文化理解教育の課題であると認識したい。

ゆえに、その立場からすれば、今回の課題では、講読テキストの主題的側面(I・1・(1)参
照)にも関連するが、西洋美術を中心視・正統視する階層構造的な美術史観を離れ、それ
も多様な美術の1つだと捉える相対主義・多元主義の視点を取り入れることが重要になる。⁽²²⁾

注

- (1)編集：愛知県美術館(寺門臨太郎・拜戸雅彦)、山口県立美術館(斎藤郁夫)『パウル・クレーの芸術(図録)』愛知県美術館・中日新聞社、1993年、を参照。
- (2)岡田匡史・隅敦・小田村泰彦・伊藤和子「『パウル・クレーの芸術』展(山口県立美術館)をもとにした鑑賞指導の試み—3つの学習指導計画」『山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第5号、1994年、pp.127-154。
- (3)Paul Klee: Das bildnerische Denken: Schriften zur Form- und Gestaltungslehre, hrsg. und bearbeitet von Jürg Spiller, Benno Schwabe & Co. Verlag Basel/Stuttgart, 1956.パウル・クレー、ユルク・シュビラー編、土方定一・菊盛英夫・坂崎乙郎共訳『造形思考(上)』新潮社、1973年、p.57。
- (4)岡田匡史・静屋智「第3回 鑑賞教育プロジェクト—『パウル・クレーの芸術』展(山口県立美術館)の題材化」『山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第6号、1995年3月発行予定、を参照。
- (5)Ⅱ・2「『パウル・クレーの芸術』展の鑑賞題材化：小田村泰彦」、Ⅲ「3つの学習指導計画」・2 前掲論文[2] pp.139-141; 149-151、を参照。
- (6)前掲論文Ⅱ・[1] p.109。
- (7)前掲論文Ⅱ・[2] p.17。
- (8)前掲書Ⅰ・[15] p.149。
- (9)同書p.158。
- (10)同書、同頁
- (11)同書p.152。
- (12)同書、同頁
- (13)前掲論文Ⅱ・[2] p.17。
- (14)前掲書Ⅰ・[15] p.160。小野は、尚子さん(長女、中学校1年生)が、同様な着眼から、「心霊写真みたいな顔が見える」と言ったことを、岡田に報告した。陽平君(長男、小学校4年生)も、「心霊写真」と聞いてすぐに見てきたそうである。この事例は、1つの対象に対して複数の観点から多義的解釈を展開する「見立て」が、小・中学校段階の事物認知の重要な側面であることを改めて想起させるものである。しかし、小野自身は、「心霊写真」のような多面体側面の不規則な調子を、印刷の問題だと簡単に理解していたそうであり、その体験を、常識の枠組を備えるおとなの見方・認識の限界を端的に示したものだとして解釈している。
- (15)同書p.163。
- (16)雨宮慧神父(上智大学)の「特別講演会」(1994年11月3日、日本キリスト教団・山口信愛教会)が終わって後、雨宮神父にこの点を確認することができ、また、ギリシャ語(縮小略語)のスペル・読み方を教えていただ

いた。雨宮神父に誌面を借りまして厚く御礼申し上げます。

(17)「魚」編集委員：秋山光和他『新潮世界美術辞典』新潮社、1985年、p.148.、を参照。

(18)「聖書 新改訳」、日本聖書刊行会、1970年、p.348.

(19)同書、同頁

(20)前掲書 I・[15] p.163.

(21)以下は、リゴベルタ・メンチュ(マヤ族[グアテマラ]出身。1992年度ノーベル平和賞受賞者)の発言である。「私たち先住民の声に耳を傾けることから始まり、相互信頼、尊敬に至らなければ、平和という夢の実現は極めて困難なのです。」テッド・ベリー他執筆、訳者：原みち子・濱田滋郎『生命の織物—先住民の知恵』女子パウロ会、1993年、p.78.

(22)「特権階層vs.周縁的価値」の2項構造を特徴とする、欧米中心型の狭い美術史観を批評した、次の新刊を参照。富山妙子・浜田和子・萩原弘子『美術史を解きはなつ』時事通信社、1994年

IV 受講生3名の課題(題材の観点・意図、学習指導案、模擬授業)

前章で、題材開発にあたって押さえるべき諸点を概説したが、演習課題では、受講生は、その諸点、ならびに、講読テキスト(I・1 参照)を、自らの観点・問題意識で咀嚼した上で、改めてテーマを設け、題材化の可能性を探り、最終的にここに掲載する3つの学習指導案をまとめた。本章は、その骨子を解説した「題材の観点・意図」、「学習指導案」、「模擬授業(事前授業)」(小野のみ)で構成する(岡田が各課題を指導)。

以下は、3名の鑑賞題材の概略である。なお、3名とも「事前授業→美術館(展覧会)鑑賞→事後授業」というフォーマットで題材を構成した。

- a.小野：新学力観(IV・1・3. では、その難しさも指摘)・脱教養主義の立場から、また、講読テキストの有効性を模擬授業で検証することを念頭に置き、鑑賞授業の新たなスタイルを提案。テキストの「異文化理解」という主題的側面(I・1. (1)参照)を取り入れ、版画鑑賞を通して15・16世紀(ルネサンス期)のドイツ社会を学ぶ展開を図る。また、3段階の指導過程(①：観察と記述視覚表現の言葉化)の徹底、②：イマジナティブな読解、③：関連する表現課題。同(2)参照)を下敷きに、「手紙」を使ったゲーム的活動(①)や彩色課題(③)を配する、ユニークな事前授業を構想。3大銅版画のスライド鑑賞(②)は、「想像→図像解釈学的なアプローチ」という流れで進み、そこで体験した「謎解き(主題の解釈)」が美術館鑑賞にリンクし、事後授業を通じて発展的に広がっていく。
- b.羽仁：創造活動における困難な試練の前に、1点を凝視して考え込んでいるかのような(解釈は多義的)、「メランコリア I」の有翼の女性像に自己投影し、クリエイティブな瞑想体験を得るという課題を、事前授業に位置づける。瞑想で得たイメージを版画鑑賞でもっと膨らませ、そのイメージをもとに物語を考え、また、平面構成の課題(事後授業)を行う。
- c.三隅：「中学校指導書 美術編」の観点を踏まえ、美術史や技法的側面の理解にウェイトを置く、知識注入型の鑑賞指導を脱して、感性の働きをベースに美的価値を感得し味わおうとする、主体的鑑賞が柱になった題材を立案。

IV-1 課題：小野素子

1. 題材の観点・意図

「美術科教育特論演習Ⅱ」の講読テキストである、Instructional Resources: Elizabeth Vallance, “Something Fishy: Cross-Cultural Subject-Matter.” (『art education』誌掲載)に紹介された、セントルイス美術館の鑑賞指導プログラムの1例は、知識優先型の鑑賞教育の考え方に縛られないユニークな視点で展開されており、現在、新しい指導内容が求められている学校教育の鑑賞教育において、まさに斬新かつ刺激的な提案として評価しうるものである。

これまで鑑賞は表現を補う領域だと一般に考えられ、教師や子どもがつくった作品を参考例・お手本として提示する、狭い範囲での鑑賞指導が実施されることが多かった。また、

美術作品の鑑賞は、美術史・様式史等の知的理解の面が強調されがちであったため、授業の中ではほとんど扱われていなかった。しかし、美術作品に触れる感動体験は、子どもに本来備わる創造性や造形感覚を引き出し高めるための素地・必須条件だと言え、これからの実践では、自分自身の素直な眼で作品を見る態度、自分なりに感じる力を、子どもにぜひ身につけさせていきたいと思う。

テキストでは、「おとなのように作品制作を続ける児童・生徒が少数である一方で、おとなもほとんどが生活の現実ばかりを見つめている⁽¹⁾」という、美術的潤いに欠けた現況を踏まえ、「見る能力(認識力)を鋭敏にすること⁽²⁾」を目標に掲げている。また、テキストは、作品解説に頼らなければきちんとした展覧会鑑賞ができないと思込む、教養主義的スタンスに立った鑑賞態度を批判し、その改善こそ美術館教育に課せられた使命だとしている。

自信に満ちた主体的鑑賞の推進は、学校教育の鑑賞教育でも重要な課題である。今回、美術館側がその趣旨に則って提起した鑑賞指導プログラムが、学校教育の学習指導としても成立するかどうかを確認することは、大変興味深いと言える。

指導資料では、異文化間に共通に見出だしうる視覚的主題の1つである、「魚」をモチーフにした作品4点を選び、4点の造形的特質や文化的意味について考えることを課題としている。また、指導構造については、①「見ることと記述(Seeing and Describing)」、②「想像(Imagination)」、③「解釈(Students' interpretations)」の3段階を提案している。以下は、各段階の活動概略である。

- ①：鑑賞活動における言葉の働きを重視し、ディスカッションや文章表現活動によって、細部までしっかり見る態度(観察力)や記述能力を養う。
- ②：作品について想像が縦横に広がるような発問を行って、諸細部に気づかせ、また、表現内容を諸観点から柔軟に解釈できる力を養う。
- ③：作品に関連した制作活動を実際に行うことにより、作品の再解釈を促す。

ところで、文化遺産として社会的に認知された美術作品であっても、それが子どもの鑑賞モチーフとして適当かどうかは解らない。おとなの価値基準で決められた美的価値を、子どもも同じように理解できるとは限らず、それを無理やり押しつけるのは問題である。そこで、美術作品の価値・背景等に関する知識を鑑賞力として捉える社会通念を1度白紙に戻し、作品を自分なりに読む力、主体的な鑑賞態度の意義・重要性を認識して、指導実践を展開する必要がある。

演習課題では、そうした視点をもって、「ドイツ・ルネサンス版画名作展」の題材化を図った。

本題材では、事前授業(2時間)・美術館鑑賞(1時間)・事後授業(1時間)の、3部構成による授業計画を提案し、児童主体の鑑賞活動を探ってみたいと考えた。なお、事前授業はその後の鑑賞活動のあり方を左右する重要な段階だが、今回、それを先の3段階(①、②、③)に沿って構成し、模擬授業と静屋教諭の鑑賞授業を通じて、テキストの鑑賞指導プログラムを検証しようと意図した。

「ドイツ・ルネサンス版画名作展」に出品された、デューラーの版画は、完璧と形容する程の熟達した技術で表現されており、芸術的水準が際立って高い。ただし、宗教的題材を扱った作品が多く、また、約500年前のドイツの時代背景や地域性がそこに絡まってくるので、教養主義で凝り固まったおとなには、鑑賞に対する抵抗がかえって大きく、1部の教養人だけがその種の作品を特権的に理解できるのだと誤解されがちである。実際、小野が美術館に赴くと、充実した展覧会でありながら、広い会場には参観者がまばらにいただけで、他の解りやすい絵画の展覧会の場合と比較し、人気に随分差があると思った。



図6(次頁に続く) アルブレヒト・デューラーの版画20点(鑑賞資料)。全図版を図録より転載。

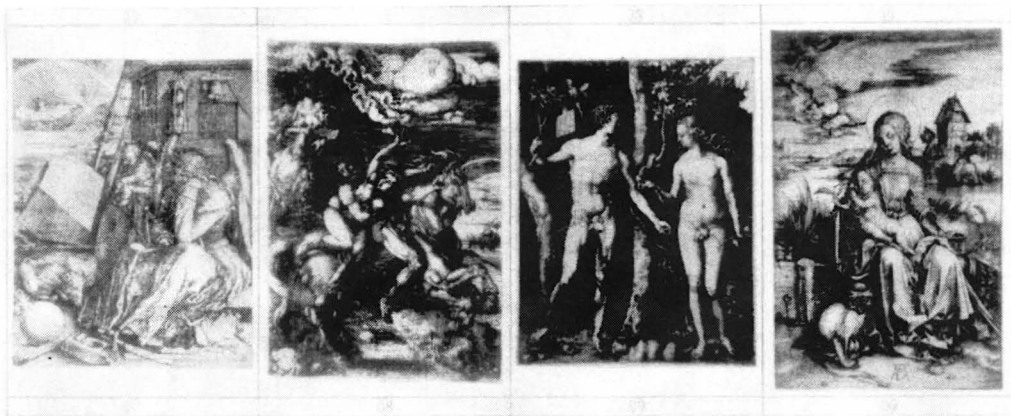


表1 作品名・制作年・技法一覧なお、図録に「所蔵者の都合によりサイズの記載は省略されていますp.21」とある。

①	「ライオンを退治するサムソン」1496年頃 木版
②	「踊る農民の男女」1514年 銅版
③	「聖ヒエロニムス」1496/97年頃 銅版
④	「博士の夢」1498年 銅版
⑤	「書斎の聖ヒエロニムス」1514年 銅版
⑥	「洋梨を持つ聖母」1511年 銅版
⑦	「キリスト降誕」1504年 銅版
⑧	「馬上の聖ゲオルギウス」1505-08年 銅版
⑨	「岐路に立たされたヘラクレス」1498年 銅版
⑩	「使徒バルトロマイ」1523年 銅版
⑪	「聖エウスタキウス」1502年頃 銅版
⑫	「死の紋章」1503年 銅版
⑬	「騎士と死と悪魔」1513年 銅版
⑭	「大きな運命の女神」1505年 銅版
⑮	「放蕩息子」1496/97年頃 銅版
⑯	「海の怪物」1498年頃 銅版
⑰	「メランコリアI」1514年 銅版
⑱	「一角獣による掠奪」1516年 鉄板(エッチング)
⑲	「アダムとエヴァ」1504年 銅版
⑳	「オナガザルのいる聖母」1498年頃 銅版

ここでは、本時案(次節参照)に示した、事前授業を重点的に述べておきたい。当該階では、児童の発達特性を踏まえ、児童の日常体験や生活環境をベースに表現の本質に迫る展開をプランした。想像力を働かせて、画面に描かれた個々のモチーフの謎解きを試みながら、作品の意味・物語性が理解できるようにしていきたい。

具体的には、①は、1.「手紙を書く活動」、2.「作品探し」の、2種の課題から成る。以下は、①の活動概略である。

- (1) 版画20点(図6・表1参照)のコピーを準備し、黒板に貼っておく。
- (2) 3大銅版画の内の1点のコピー2枚(普通/薄い|濃淡|の2種類)を内側・見開き頁に貼った、2ツ折りのカード(画用紙)を配る。
- (3) カードの版画(左頁|普通|)についてできるだけ詳細・精確に説明した手紙を友達に書くことで、観察眼・記述能力を養い、併せて作品鑑賞に対する興味づけを図る。
- (4) 手紙の説明を読んで、作品の視覚的イメージが湧いてきたら、黒板の前に出て、その作品を20点の中から探し出す。

②では、発問を軸に、3大銅版画のスライド鑑賞を実施する。発問を通して、各種モチーフに目を向けさせ、さらにモチーフ相互間の関係について考えさせながら、作品に込められた作者の意図を自分なりに想像・解釈する活動を進展させる。

③では、カードの版画(右頁[薄い])の白黒の世界を、自分なりの感じ方で、パス・コンテ・色鉛筆・クービーペンシル等で彩色する表現課題を通して、遠近表現や質感・量感表現等の優れた点を感覚的に捉えさせる。また、その結果を見せ合う活動の中で、1つの版画でも多様な解釈があることを実感させる。

こうして、事前授業での各段階を経る内に、本物を見たいという願い・意欲が高まり、次時の活動である美術館鑑賞では、主体的な鑑賞活動の展開が期待できると思う。

事後授業では、前時で味わった感動を思い起こしながら、諸作品について話し合う活動を行う。また、最後には、「異文化」を意味する15・16世紀のドイツ社会の様子や、版画表現の寓意的側面をめぐる学的解釈等についても、児童の興味・関心に即した形で解りやすく解説し、有意義な新しい知識を与えたいと考えている。

2. 学習指導案

第6学年図画工作科学習指導案

指導者 小野素子

〈想像することを楽しみながら、異文化の版画作品に親しむ〉

1. 題材名「版画にかくされた謎—15・16世紀のドイツの社会を知ろう」

2 題材について

(1)児童の実態

鑑賞の活動は、造形作品のよさや美しさに対する憧れの感情に基づくものであり、また、その感じ方は、個人のもつ感覚や感情をベースにして、その個人を取り巻く環境や生活経験、および、造形体験等により様々に変化する。

第5・6学年の高学年の時期には、児童は客観的な見方や感じ方が可能になり、自他の造形作品を、比較や選択をしながら、共感的、あるいは、批判的に見たり感じたりできるようになる。しかし、客観性が芽生えるこの時期には、同時に、集団への同化意識が強くなり、ともすれば画一的で再現的な表現に価値があると考えてしまい、そのような造形表現や作品を好んだり美化したりする傾向が見られるので、この時期の児童に対しては、多様なものの見方や感じ方ができるよう、教師は十分配慮する必要がある。

そこで、造形作品の見方にある一定の美の基準に従わせるのではなく、自分なりの解釈をもってその作品のよさや美しさを理解する活動の充実を図るために、独立した鑑賞の時間を設定した。

(2)題材の意図と可能性

従来の鑑賞指導は表現活動に付随して扱われていたため、鑑賞指導と言っても、参考例やお手本として教師や児童のつくった作品を提示するという形態が多かった。また、美術作品の鑑賞では、美術史や様式史等の知的理解の面を重視する傾向があったが、実際のところ、美術史や様式史等を中心とする鑑賞授業は余り行われてこなかった。

しかし、文化遺産の価値を有する美術作品には、心惹かれるよさや美しさが豊富に含まれており、鑑賞の方法次第で児童に大きな感動を与えることができると考えられる。それには、知的理解の面を重視して、作品を分析的・説明的に解釈させるのではなく、児童自身の感覚や感情を大切にしながら作品を見つめさせることを基本にすべきである。そして、作品に対する作者の情熱に敬意を払い、また、作品の中に満ち満ちた作者の思いや願いを自分なりに想像したり、友達の様々な解釈を聞いたりすることにより、自分なりの見方や感じ方を高めていくことが重要だと思える。その活動から得られた感動体験や造形感覚への刺激や多様なものの考え方は、確実に児童の美的な資質や能力を高め、内面には創造性の素地が培われていくことであろう。

このような視点に立ち、本題材では山口県立美術館で現在開催されている、「ドイツ・ルネサンス版画名作展」を鑑賞モチーフとして取り上げることにした。

この展覧会は、ドイツ・ルネサンス期最大の画家アルブレヒト・デューラーの代表的な版画作品を中心に、デューラーの前の世代の作品や同時代の画家の作品、デューラーの弟子やデューラーに影響を受けた画家の作品で構成されており、出品総数は約130点である。

デューラーは、14世紀末に盛んに制作されはじめた西欧版画を芸術として成熟させ、技術的に完璧なまでの高い水準の作品を何点も生み出した。その偉業は後世に多大な影響を与え、今日に至るまで比類なきものとして燦然と輝いている。だが、彼の版画作品は宗教的・主題によるものが多く、その上、今から約500年もの前の時代背景やドイツという地域性に深く根を下ろしたものであるため、それを鑑賞対象として取り扱うにあたり、児童の心を揺さぶる、感動的な出会いができるかどうか、多少懸念される面がある。しかし、個々のモチーフが訴えるものや画面に秘められた物語的内容に注目してみると、その表現の面白さに想像が掻き立てられ、意外なまでの多様な見方・感じ方ができそうである。また、版画の技術的な面に児童の関心が行くのは十分予想されることであるが、児童の素朴な感じ方を大切にしながら、その感動を糸口として、作品の中に込められた感情や願いに各自が思いを馳せるような展開を考えたい。

そこで、事前授業では、「1枚の版画について詳しく説明した手紙を友達に書く」という活動を行い、作品に対する興味づけを図り、次に代表的な銅版画3点に対して各々の解釈を自由に出し合う活動を設定し、作者が意図した内容(謎)に迫りたい。また、ワーク的な活動も取り入れ、白黒の世界(版画コピー)に自分なりの仕方では彩色することにより、感覚的に遠近法や質感・量感の優れた表現に気づかせるとともに、各自の作

品解釈に基づいて進められた色彩表現をお互いに見合う活動も行いたいと思う。こうした諸活動を通して、児童は、各自の見方・感じ方には差があり、それぞれが尊重されるべきことや、誰もが共有できるよさや美しさが作品の中にあることを理解していくはずである。

なお、15・16世紀のドイツ社会という異文化の作品に触れることにより、異国への興味や関心が高まり、そのことが結果的に自国の文化を見つめる契機にもなるため、この鑑賞授業は国際理解教育の側面ももっていると考えられる。異国の多様な美術作品に出会う体験は、児童にとって大きな価値があり、これからできるだけ多くの鑑賞の機会をつくってほしいと思う。

以上、題材の意図と可能性を述べてきたが、本題材で構想した諸活動を通して、児童主体の鑑賞のあり方が提案できたと願っている。

3 題材の目標

- (1)異文化の版画作品のよさや美しさに関心をもち、親しむことができる。
- (2)想像することを楽しみながら、自分なりの見方・感じ方ができる。
- (3)お互いの意見を尊重し合い、作品に対する多様な解釈があることを知る。

4 指導計画

第1次(2時間)・事前授業(本時)—15・16世紀ドイツの代表的な銅版画を中心に想像することを楽しみながら、それぞれの解釈を聞き合う。

第2次(1時間)・美術館鑑賞—異文化の版画作品のよさや美しさに関心をもち、自分なりの見方・感じ方ができる。

第3次(1時間)・事後授業—美術館鑑賞で感動を味わった作品のよさや美しさ、自分たちの文化とは違う文化の内容(15・16世紀のドイツの社会)について話し合う。

5 学習活動全体の流れ

児童の活動	予想される児童の意識の流れ	教師の働きかけと評価
第1次 1～2時(本時) 想像することを楽しみながら、デューラーの版画にかくされた謎を解こう。 1. 鑑賞の視点を理解する。 ・1枚の版画について詳しく説明した手紙を書く。 ・想像することを楽しみながら、版画作品に関心をもち、ワーク的な活動を通して、作品から感じるイメージを表現する。	①(『メソコリアI』)について ・この人は何をしているのかな。 ・回りに不思議なものがいっぱいあるよ。 ・何か考えていて困った様子だな。道具がたくさんあるので、算数が解らないのかな。 ・静かな雰囲気だから青色で塗ろう。 ・明暗が白黒でよく表されているなあ。	・友達の想像を助ける手立てになるような手紙を書かせるとともに、文章表現活動を通して、1つの作品をしっかり見つめる姿勢を経験させる。 ・具体的な発問を用意して、鑑賞の視点が理解できるようにする。 ・多様な解釈を認める姿勢を示し、想像することを楽しめるようにする。 ・ワーク的な活動を取り入れ、作品の表現を体感できるようにする。 【楽しんで想像し、自分なりの解釈ができたか。(発言、表情、活動)】
第2次 1時 自分なりの見方・感じ方で異文化の版画作品に親しもう。 1. 鑑賞の視点を確認する。 ・自分なりの見方・感じ方で版画にかくされた謎(物語性)を想像しながら、鑑賞を楽しむ。 2. 鑑賞のマナーについて共通理解する。 3. 美術館での鑑賞活動を自由に行う。 ・印象的な作品については、作品名を心に留めておく(メモを活用してもよい)。	・本物の版画が早く見たいなあ。 ・作品には、どんな人や物が描かれているだろう。 ・他の鑑賞者に迷惑をかけるないようにしよう。 ・本物は結構小さいなあ。 ・これが授業で見た版画作品だ。 ・うまく彫ってるなあ。 ・この絵には、何か不思議なことがかかっているぞ。	・前時の活動を想起させ、実物鑑賞への期待感を高めるようにする。 ・公共施設での鑑賞態度について理解させておく。 ◆私語を慎む。 ◆館内で騒がない。 ◆作品に触れない。 ・集合時間と集合場所を決めておく。 ・館内を巡回しながら、児童1人1人の様子を見て回り、鑑賞活動に集中できない者に対しては、対話を通して作品に興味をもたせる。 【異文化の版画作品のよさや美しさに関心をもち、自分なりの見方・感じ方ができたか。(活動)】
第3次 1時 心に残った作品のよさや美しさ、また、自分たちの社会との違いについて話し合おう。 1. 心に残った作品について話し合う。 ・印象的だったところについて。 ・内容について自分なりに解釈したことについて。	・今とは違う不思議な世界の絵だったよ。 ・天使や怪物が描かれているので、きっと困ったことがあって助けてほしかったのかな。	・作品(コピー)を黒板に提示し、友達の意見が理解しやすいようにする。 ・作品に対する多様な解釈をお互いに認め合う。

<p>・自分たちの社会との違いについて。</p> <p>2 15・16世紀のドイツの社会について話を聞く。</p> <p>3 本題材で学習したことについて、感想を書く。</p>	<p>・着ているものやもっているものが違う。</p> <p>・今はこんなことは起こらないよ。</p> <p>・ひどい病気が流行って、人々は救いを求めて、神様を信じていた様子が、この絵に描かれているんだな。</p> <p>・自由に想像して絵を見ると、とっても楽しかったな。</p> <p>・15・16世紀のドイツは今の日本とは随分違うな。</p>	<p>・15・16世紀のドイツの社会で発達した、自分たちの文化とは違う文化について解説し、異文化の版画作品への理解を深める。</p> <p>・自分の感じたことを、自由に文章でまとめるようにする。</p> <p>【心に残った作品について、感じたことがはっきり言えたか。(発言)】</p> <p>【異文化の版画作品について理解できたか。(発言・感想)】</p>
--	--	--

6 本時案(第1次[1~2時])

(1)ねらい

異文化の版画作品に関心をもち、想像することを楽しみながら、自分なりの解釈ができる。

(2)準備するもの

- ・教師=デューラーの版画作品(コピー):「13歳の自画像」、①「メランコリアI」、②「書斎の聖ヒエロニムス」、③「騎士と死と悪魔」①、②、③:小サイズ[カード用。「普通/薄い」1セット、大サイズ[鑑賞用]。※模擬授業ではスライドを準備)、版画作品(コピー)20種(黒板提示用)、用紙、磁石
- ・児童=パス、コンテ、色鉛筆等の彩色用具

(3)本時の活動の流れ

児童の活動	予想される児童の意識の流れ	教師の働きかけと評価
1. 画家デューラーについて知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもなのにうまく描けるなあ。 ・細かいところまでよく見ているなあ。 ・他にどんな作品を描いているのだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・13歳のとき描いた自画像をもとに、デューラーの芸術的才能や15・16世紀のドイツでの活躍について語り、版画作品の鑑賞に対する意欲づけを図る。 ・15・16世紀のドイツの社会についても、簡単に触れておく。
<p>想像することを楽しみながら、デューラーの版画にかくされた謎を解こう。</p>		
2 本時の提案を聞く。 Seeing and Describing		
3 1枚の版画について詳しく説明した手紙を友達に書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・①—この人は何をしているのかな。回りに不思議なものがいっぱいあるよ。人や物をうまく描いているなあ。 ・②—この人は1人で何をしているのかな。あれ、変なライオンがいるよ。 ・③—この人はどこへ行くのだろう。回りに不思議で怖そうな生き物がいるよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・①、②、③のいずれか1点(「普通/薄い」の2種のコピー)を貼ったカードを用意し、言葉だけでその作品だと解るような、詳しい説明の手紙を書くために、人物の様子や回りに描かれているモチーフに注目するよう助言することにより、1つの作品をしっかり見つめる姿勢を経験させる。 ・友達が手紙を読んで作品をよく想像できるように説明させる。 ・デューラーの版画20枚の中から、手紙の内容に合った作品を見つけ出すようにする(ゲーム化)。
4 友達からもらった手紙を読んで、説明された絵を見つける。 Imagination	<ul style="list-style-type: none"> ・①—この人は何か考えていて困った様子だな。道具がたくさんあるので、算数が解らないのかな。 ・②—この老人は誰かに手紙を書いているけれど、誰も近づけないようにライオンが番をしているよ。 ・③—この騎士はあのお城に行くのかな。ちょっと怪物が怖そうじゃないぞ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・描かれている人物や1つ1つのモチーフに着目するような発問を用意し、作品を自分なりの見方・感じ方で鑑賞させ、作者の意図が解釈できるようにする。(発問内容)・中心人物の様子について <ul style="list-style-type: none"> ・回りにあるモチーフの意味と人物との関係について ・作品の中の物語性について ・作品の中に表現されている様子が、自分たちの文化とは違う文化のものであることにも気づかせたい。 ・友達の意見を聞き合う中で、作品に対する多様な解釈があることに気づき、そのよさをお互いに認め合うよう配慮していきたい。
5 ①、②、③の版画作品について、想像することを楽しむ		

<p>Students' interpretations</p> <p>6. 友達に手紙で説明した版画作品(コピー[薄い])を、各自のイメージで彩色する。</p> <p>7. 本時の活動を振り返り、次時の美術館鑑賞での視点を確認し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・静かな雰囲気だから青色で塗ろう。 ・明るいと暗いところが、白黒でよく表されているなあ。 ・本物の版画が早く見たいなあ。 ・他の作品にはどんな人や物が描かれているだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・彩色をしながら、感覚的に遠近の巧みな技法や質感・量感の優れた表現に気づかせたい。 ・各自の捉えたイメージが多様であることに気づき認め合うようにする。 <p>— 評価 —</p> <ul style="list-style-type: none"> ○異文化の版画作品に関心がもてたか。 (態度・表情・発言) ○想像することを楽しみながら、自分なりの見方・感じ方ができたか。 (態度・表情・発言・ワーク的活動) ○お互いの解釈を尊重し合えたか。 (態度・発言)
--	--	--

3 模擬授業(事前授業)(図7～図12)

小野の模擬授業は、山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター・授業実践演習室で、事前授業(1994年6月30日/3・4時限[10:20～11:50])、事後授業(7月7日/4時限[11:05～11:50])の、計2回実施された。

児童役(「美術科教育法Ⅰ」受講生12名)は、下記の通りである。

- 中学校教員養成課程(美術教育): 河村光恵・館野聡美・中谷容子・原田桃子・細川邦隆
- 小学校教員養成課程(教室所属[副専]:美術教育): 佐藤裕子・高津祐司・立川万博・二階堂和美・西真奈美・日浦マリ
- 中学校教員養成課程(英語教育/教室所属[副専]:美術教育): 伊藤昌彦

両授業の間に、デューラー版画展を自主的に鑑賞してくることを学生に指示した。なお、「美術科教育法Ⅰ」でも、当模擬授業に連動する形で、同展をもとにした題材づくりを課題とし、全課題を「鑑賞題材の構想・開発—「ドイツ・ルネサンス版画名作展: デュッセルドルフ美術館所蔵—デューラーとその時代」を観る」と題する冊子にまとめる予定である(岡田補記)。

*

学生を小学校6年生に見立てての模擬授業とあって、授業者側・児童役側双方に多少の構えが生じた。美術史・様式史等の知識・教養を必要とする、従前型の鑑賞授業が展開することを警戒してか、学生は緊張気味であり、最初は学習活動に対する期待よりも不安な心境の方が強く感じ取れた。

学生がリラックスしはじめたのは、①で操作活動に入ってからである。「1枚の版画について詳しく説明した手紙を友達に書く(本時案3)」という課題に取り組むには、まず書き手自身が作品を細部にわたって知る必要がある。学生は克明な観察を課されたわけだが、小学生に負けず劣らず純粋な興味の眼を輝かせて、カードの版画のコピー資料を喰い入るように見つめる理想的展開となった。

手紙は、「人物、犬、光、梯子、砂時計etc.」といった、デューラーの版画を特徴づける諸モチーフについて説明したものが多かった。関心の度合や文章表現力に幅があり、モチーフの種類・列挙数や説明内容に違いが見られたが、要領を得た解りやすい説明がほとんどで、全員が対象の版画を短時間で見つけることができた。

学生の楽しそうな表情や動きから、このゲーム的活動には、鑑賞意欲を刺激し高める効果が期待できると確信した。

②では、鑑賞作品を3大銅版画の3点に絞り、授業者は各版画に関する発問を用意した。その意図だが、まず誰もが視覚的に認識できるモチーフを選んで発問し、個々のモチーフを細部まで詳しく見る態度を学ばせようとした。そして、徐々に発問内容を鑑賞者の想像力を引き出す方向に変えていった。しかし、この活動では、細部にわたって発問したいと



図7 「13歳の自画像」を解説(小野[授業者])。版画20点は黒板にあらかじめ貼っておいた(本時案1. 参照)。写真撮影(図7～図11): 羽仁。

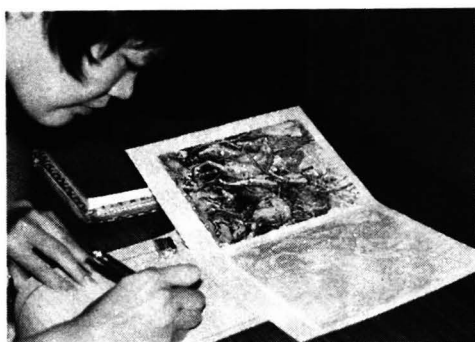


図8 カード資料(「騎士と死と悪魔」左頁)を見て詳述する、手紙の課題(二階堂)(本時案3. 参照)。



図9 手紙を手がかりにしたの、作品搜しの活動(手前が細川)。ビデオ撮影者: 三隅。当活動に入る前に、提案(目標)事項を書いた紙を黒板に貼った(本時案4. 参照)。



図10 小野・受講生(児童役)間の質疑応答で進行した、スライド鑑賞の1場面(本時案5. 参照)。



図11 カード資料(「メランコリアI」右頁)を、色鉛筆で彩色する表現課題(原田)(本時案6. 参照)。

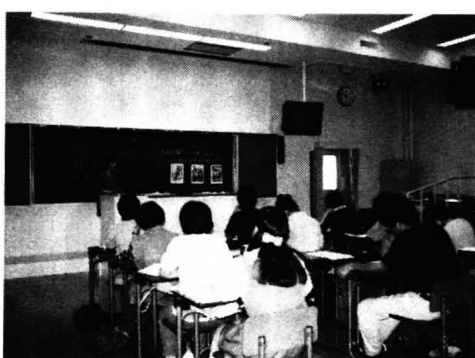


図12 事後授業(参考)。4気質論(4性論)や、3大銅版画の相互関係を推論するのに有益な1理論、魂の3段階説(アグリッパが自著「オカルト哲学」で論述)を解説。

いう授業者の思いが強過ぎた観があり、随分時間をかけてしまった。発問対象のモチーフを限定し、着眼点をもっとはっきりさせるべきであった。また、発問せずに未解釈の部分を残しておいた方が、逆に想像が広がって、1人1人の解釈がより豊かになったようにも思える。奥に潜む物語を推理しながら語ることは、結構難しそうで、自分の考えをまとめるための記述の時間を設ければよかったと反省している。

想像力というものは、社会経験や知識の蓄積によって広がっていくように見える。だが、能力・資質の個人差や環境的影響(後述)があるので、成長と共に想像力が広がっていくとは一概に言えず、むしろ事態は逆のように思える。秩序維持のためのルールや常識・社会的慣習を基盤に形成された生活環境は、そこに生きる人間の思考を一定の方向に向けさせる力を持っているので、成長するに従って概念・価値観は固まっていき、想像力は衰退していくようである。精神発達の観点から見た場合、子どもの方がおとなよりも想像力に勝ると言える。感情を素直に表現し、活動的で冒険心に富み、挑戦意欲が旺盛な子どもの側から、柔軟で多様な解釈が生まれ、予想もつかない答が飛び出すことが多い。

最後の③では、鑑賞作品に関連した操作活動を取り入れることで、作品の再解釈の場を設定しようとした。白黒の世界の彩色は、基本的に自分のイメージによる外なく、彩色の仕方には自ずと作品解釈に関する個性が反映し、結果的に各自の鑑賞の視点の差異が明らかになった。

彩色の仕方に関しては、a.「個々のモチーフを塗り分ける」、b.「イメージで捉えた色を画面全体に施す」という、2種類の基本的タイプが認められた。授業者の意図としては、各モチーフの意味が複雑に組み合わせられて生まれてくる、作品の物語性を解説させたかったので、モチーフにだけ目が行き、かつ、モチーフを固定観念で捉えようとするがゆえに、作品解釈が浅い嫌いがある、a.よりも、作品解釈の創造的側面に優れ、その解釈を礎に感覚的・直観的な色彩表現を行おうとする、b.を高く評価したいと思う(Ⅲ・2 (2)・B参照)。

本時は2時間扱いであり、3段階の活動の所用時間をあらかじめプランしてはいたものの、前述したように、②の発問・スライド鑑賞に多くの時間を費やしてしまい、③の彩色活動の時間を十分保証できないまま模擬授業を終えざるをえなかった。その原因の1つに、多種の操作活動を取り入れたことが挙げられる。「手紙を書く」、「絵を捜す」、「彩色する」等の活動は、遊びの要素を含み、体を動かすので学習内容が体験的に身につく、学習意欲の高揚を図れるが、時間がかかり過ぎるとい難点がある。1題材の時間配分が限られている学校教育のカリキュラムの中で、この種の活動を授業に組み入れるには、その学習効果を諸側面から綿密に検討し、内容を精選することがポイントになってくる。

さて、授業後、課題として、学生に今回の模擬授業の感想と美術館鑑賞を体験してのコメントを書いてきてもらったところ、下記のような感想・意見が出てきた。

a.「授業を受けてから、この展覧会を見なおしてみると、より細部に注目して見れるようになった(西)」

b.「小野先生の授業を受けてみて、「ああ、こういう風に見てみると、面白いな」と考えさせられた。(中略)最初は味気なく思えたデューラーの版画も、視点を変えてみてみることによって、色々な興味深い面があることが分かった(河村)」

c.「ひとつの作品について、鑑賞する人の数だけストーリーが展開される(細川)」

ところで、鑑賞の新たな視点に関する意見が多かった中で、新学力観に言及するものもあった。

d.「先生は最近主流になってきた「新しい学力観」に基づいて授業を進められたのだろうと私は思います。私も大学の講義では「新しい学力観」を勉強し、納得していたつもりだったのですが、この授業を受けて、異和感を感じないではいられない、「何だかおかしいな」と思わずにはいられない自分に驚いてしまいました。頭で(新しい学力観[小野補足])を理解

しているにすぎなかったようです。(改行)先生がデューラーのおいたちや時代背景を話してくださいる時は何だかうれしく思いました。そういう知識を得ることが自分の喜びになっているようです。(改行)これは一昔前の私が受けていた教育、学力観の影響なのでしょう(日浦) d.の学生は模擬授業を通じて抱いた思いを正直に書いている。そこには、新学力観に対する驚きや戸惑い、また、自らの価値意識に対する懐疑的態度を認めることができ、授業者側にとって考えさせられるコメントであった。

知育偏重主義は、実は授業者である小野自身にも強く染みついてしまった教育観であり、まだ越えられないハードルである。その脱却・改善を図るために、新学力観を柱とする教育課程が施行されて早3年になるが、学校教育は今も困難な諸問題を抱えており、教師も子どもも親も、皆、混乱の中にあるというのが実情である。

IV-2 課題：羽仁真弓

1. 題材の観点・意図

鑑賞教育では、作品について何らかの知識を得るということではなく、まず作品から自分なりに何かを感じ取るということが重要なのではないかと思う。それは、そのスタンスが、美術館・画廊等で展覧会を鑑賞する場合だけに限らず、日常生活・社会生活においても基盤になるものだと思えるからである。

自分の意見をもつことは、生き方の本質に関わることである。だが、現代社会では自分で感じ取り考える前に、既成の情報や指向・価値観が無数に存在してしまっており、その現実を前に、自分の考えを価値あるオリジナルなものとして素直に受け入れるのは難しい。今日、困難な課題だが、目まぐるしく変動する諸事象を逃れ、自分の中にある知識以前の感情のようなものの大切さに気づかなければならないと思う。

今回の授業計画では、上述した問題点を踏まえ、誰とも意見交換しない時間を長く取ることで、自分の内側の想像・論理の世界を見つめるという活動を考えた。

「ドイツ・ルネサンス版画名作展」に多数出品された、デューラーの版画には、そうした活動を可能にする、2つの側面がある。第1は、単純には理解しがたい諸種のモチーフが描かれていること、第2は、画面の中に様々な物語が読み取れることである。そこで、3大銅版画の内の1点、「メランコリア I」を鑑賞作品に選ぶことにし、そこに表現された、⁽⁵⁾「思考する創造的な人間の精神状態(羽仁要約)」を、上記活動と重ね合わせてみようとした。

マルシリオ・フィチーノ「人生論3巻」の人文主義的解釈によれば、「メランコリア I」^{メランコリア}で主題化された「憂鬱質」は、「瞑想的・創造的な人間、自分に対して疑念を持ち思い悩む人間の特徴」⁽⁴⁾を表し、「デューラー自身の精神的自画像」⁽⁶⁾だと解釈される場合もある。学習活動の場面では、当版画に象徴的に表現された、創造活動に深く関わるメランコリックな精神状態を生徒に体験させてみたい。

事前授業では、まず「メランコリア I」を提示し、そこに描かれた人物像(憂鬱質)に関する基本的事項を説明し、残りの時間は瞑想の時間とする(思春期に属する中学生の場合、考える主たる対象は悩みか理想ではないだろうか)。授業終了前に、自分は何を考えたかを簡単にメモさせ、その内容が、自分を中心軸とする世界観、主観的観点から書かれたものであり、誰もが違ったことを考えており、どれがよくてどれがよくないという価値判断ができないという点をコメントしておく。

次時では美術館に行き、実際に作品を鑑賞する。鑑賞指導に関しては、自由に素直に感じ取ろうとする意識を高め、自分の感情や生活体験をベースに表現内容を味わわせるようにし、感想や発展した思いをメモさせる。また、気に入った1点から物語をつくるという

課題を出す、それには評点をつけない。

事後授業では、事前授業でメモした瞑想の内容をもとに、平面構成の課題を行うが、この表現活動を通して、生徒はより深くメランコリックな精神状態を体験できるのではないかと思う。

この鑑賞題材の軸的活動は、美術を考え想像することである。その体験が視野の広がりや思考の活性化に繋がることを第一義と考えるが、知識ではなく眼に見えない精神活動をここでは問題にしているので、学習効果がたとえすぐには観察できなくてもよいとした。

2. 学習指導案

第2学年美術科学習指導案

指導者 羽仁真弓

1. 題材「メランコリーを体験しよう」

2. 目標

自分だけの感じ方を大切にしよう。

3. 題材設定の理由

(1)教材観

鑑賞授業は、作家についての、また、作品の内容についての知識を深めるよい機会である。だが、本題材では、自分なりに感じ考える態度を重視し、「メランコリアⅠ」の鑑賞をきっかけに、絵の中の人物(憂鬱質)を体験するという活動を考えた。

そして、その体験をもとに自分なりの観点で絵の中のモチーフや物語の内容を感じ取ることができるのではないかと、また、その逆に、自分の想像の諸断片を組み合わせて1つの物語が作れるのではないかと考えた。

(2)生徒観

「メランコリアⅠ」を中学校2年生の視点で鑑賞し、その体験を自分の生活の中の諸体験と重ね合わせることで、絵の中の人物の気持ちを味わうことができると思う。

また、思春期特有の複雑な感性を働かせ、自分の想像の中で、様々なモチーフの意味を繋ぎ合わせて物語をつくることにより、自分なりに解釈する力が育ってほしい。

(3)指導観

本来ならば、教師の助言や友達との意見交換等によって、作品に対する意識が広がり発展していくのだろうが、本題材では、まず自分らしく素直に作品を受け止めさせ、1人だけでの思考・想像活動を充実させるようにする。

4. 指導計画

第1次(1時間)・事前授業—「メランコリアⅠ」(瞑想)を体験する。

第2次(1時間)・美術館鑑賞—自分なりの見方・感じ方ができる。

第3次(2時間)・事後授業—瞑想したことをもとに平面構成をする。

5. 指導過程

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点
1	①「メランコリアⅠ」を見ながら説明を聞く。 ・憂鬱質について ・考えることについて ・メモの取り方 ②瞑想する。 ③考えたことや想像の中に出てきたものを、文や言葉にして残す。	①方向づけるようなことは言わないよう気をつける。 ②しゃべらないようにする。 ③箇条書きでもよい。
1	①自由に鑑賞活動を行う。 ②気に入った1点を選び、その絵から物語をつくりメモしておく。	①美術館での鑑賞態度について理解させる。 ②感想や思いを発展させながら、表現内容を深く味わわせる。
2	①瞑想時に取ったメモをもとに、物語的な平面構成を行う。 ②評価。	①瞑想時に出てきた様々なイメージを作品に取り入れてみるよう勧める。 ②自分の表現したかったことがきちんと表現できているかどうかを確認させる。

IV-3 課題：三隅信洋

1. 題材の観点・意図

「中学校指導書 美術編」では、「鑑賞の活動」を次のように解説している。

「鑑賞の活動」とは、美術作品などのよさや美しさを味わう美的体験であり、作者の個性などに気付きそれを美として価値付けていく活動である。また、「味わう」「感じ取る」「関心をもつ」「親しむ」「大切にする」「尊重する」など、感性と深くかかわっており、極めて個性的、主体的な活動である。⁽⁶⁾

本題材では、「ドイツ・ルネサンス版画名作展」の柱である、デューラーの版画に焦点を絞り、上掲の解説の趣旨に沿った指導内容を提案したいと思う。

今回の課題に取り組むにあたり、熟慮しなければならない問題点がある。それは、生徒がデューラーの版画に興味を抱くだろうかという点である。ただでさえ美術鑑賞というのが生徒にとっては馴染みが薄いと思えるのに、その生徒が版画の一見地味な白黒の世界の中によさを見出すことができるのかどうか、正直言って解らず、ともすれば退屈だと捉えてしまうのではないかと心配である。

そうした活動展開を未然に防ぐには、事前授業時に、特徴的な諸ポイントを明確に解りやすく説明しながら、版画表現のよさを伝えていく必要がある。しかし、その説明が生徒に先入観を植えつける結果となり、本物の作品を前に、何の発見もなく新鮮な感動が少しも湧いてこないというのでは、問題である。

展覧会では、デューラーの版画約80点の他、同時期や前後の世代の諸作品約50点が展観された。版種は銅版画・木版画がほとんどであり、クロス＝ハッチングを駆使した細密描写を特徴とし、また、宗教的題材を扱った作品では、人間や動物、または、砂時計・天秤・頭蓋骨等の諸種の寓意的モチーフが描かれている。

そこで、展覧会を見る前に、技法や画題に関わる歴史的背景等について説明しておけば、生徒は予備知識(作品理解の観点)をもって鑑賞活動に臨むことができ、また、説明が興味・鑑賞意欲を掻き立てることも起こりうる。ただし、その際、知識を主とする受動的な学習展開にならないようにすることが基本になる(その点が一番難しいのだが)。

いずれにせよ鑑賞教育で大切なのは、生徒自身が鑑賞を通して自分なりに美的価値を感じ味わい楽しむことである。

2 学習指導案

第2学年美術科学習指導案

指導者 三隅信洋

1. 単元名「デューラーの版画を鑑賞しよう」

2 単元構成の意図

今回、鑑賞するデューラーの版画は銅版画や木版画であり、かなりの細密描写で表現されている。生徒は、その精度、技術力の高さに驚き、技術面に興味を抱くかも知れないが、活動がそこだけに留まらぬよう気をつけなければならない。なぜなら、この時期の生徒は、「うまくできないから」、「そっくりに描けないから」という理由で美術が嫌いになることが推察され、鑑賞授業でそうした技術面に重点を置き過ぎると、自分の描画能力を一層卑下し、美術がもっと嫌いになりかねないからである。

そこで、本題材では、技術的な事柄は副次的に扱うことにし、美術作品に備わった美的価値を自分なりに味わい楽しむことを学ばせたい。

3 題材の目標

- ・美術作品を鑑賞する能力を身につけ楽しむことができる。

4 指導計画(総時間数：3時間)

第1次・事前授業(展覧会鑑賞の導入)

第2次・展覧会鑑賞

第3次・事後授業(展覧会鑑賞のまとめ)

5 単元構成表

過程	学習内容・学習活動	教師の働きかけ
第1次 導入	<ul style="list-style-type: none"> ・デューラーやその時代の歴史的背景について学ぶ。 ・銅版画について学ぶ。 ・鑑賞のポイントについて学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・余り難しい話にならないようにし、なおかつ、興味をそそるものにする。 ・デューラーはどんな思いを表現しているのだろうか?等。
第2次 鑑賞	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館での注意事項を考える。 ・美術館での注意事項をもう1度確認する。 ・心に残った作品や感じたことをメモする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞のマナーについて考えさせる。 ・他の鑑賞者に迷惑をかけない。 ・作品に触れない。 ・自分の感じたことを素直に書き留めるよう促す。 ・館内を巡回し、困っている生徒にはアドバイスする。
第3次 まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞を通して感じたことを発表する。 ・人それぞれ違った感じ方があることを学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が感じたことを何でも言えるような雰囲気をつくる。 ・生徒の作品とも関連づける。

注

- (1)op. cit., I -[1] p.26.
- (2)ibid., p.26.
- (3)前掲論文Ⅱ -[2] p.17.「考え探究したことが実現できないことを自覚して失望する創造的な人間の精神状態」が原文。
- (4)同論文p.18.
- (5)同論文、同頁
- (6)文部省「中学校指導書 美術編」日本文教出版、1989年、p.59.

まとめ

演習では、実物鑑賞に最大の意義を認める立場から、これまでに3つの展覧会を鑑賞モチーフに選んできた。「アメリカの遺産—絵画の150年」⁽¹⁾、「バウル・クレーの芸術」、そして、今回の「ドイツ・ルネサンス版画名作展：デュッセルドルフ美術館所蔵—アユラーとその時代」である。

見る機会が限られている実物は、図録・画集類や写真・スライド資料等とは比較にならない程、生きた豊穡な鑑賞体験を可能にし、その実物を使った鑑賞授業は、贅沢と言ってもいい程の価値ある理想的形態である。しかし、その場合、授業立案者側に柔軟な視点と展覧会を題材化する基礎的メソッドがなければ、その授業実践は、児童・生徒に美術館の展覧会をただ見せるだけの、指導が介在しない通常の鑑賞レベルで終わってしまうはずである。

そこで、演習では文献講読やフリー・トークを通じ、美術鑑賞の切り口の多様さ、鑑賞指導における主題設定や形態・方法論等の諸アイデアを学ぶことに努め、その成果を鑑賞題材の形にまとめようとしてきた。なお、この課題には、以下2側面がある。

- a.美術観の拡大：授業立案者自身が、鑑賞対象に対してもっていた自らの偏見・誤解や視野の狭さに気づき、新しい見方・解釈を諸角度から学んでいく。
- b.題材開発のメソッドの習得：鑑賞対象の幅広い理解を背景に、題材開発の様々な可能性チャレンジングを考え、児童・生徒が楽しみながら重要な諸点を学びうる、ユニーク(時に挑戦的)な鑑賞題材を練り立案する。

本論に収載した受講生3名の課題は、そうした2側面を経験しながらまとめあげていったものである。無論、各自の観点・問題意識によって、題材化の切り口は違っている。今度、3名が別の展覧会を鑑賞モチーフに取り上げ、今回とは異なるスタンスで個性的な鑑賞題材を構想・開発することを期待している。なお、小野は、題材開発のみならず、自題材による2度の模擬授業、ならびに、検証の意味を備えた静屋教諭による鑑賞授業を経験することができ、その経験は現場での鑑賞授業実践に必ず有意義な形で生かされるはずである。

最後になるが、今後も演習活動の一層の充実・発展を図り、文献講読による鑑賞教育研究をベースに、種類が異なるより多くの展覧会の鑑賞題材化にトライしていきたいと考えている。

注

- (1)編集：朝日新聞社・山口県立美術館・福島県立美術館・高松市美術館・アプトインターナショナル「アメリカの遺産—絵画の150年(図録)」朝日新聞社、1992年、を参照。